

はいはい、お薬出して
おきますねー。

ぬらぬら棒

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——外見というものは残酷である。

※校正が終わりましたので公開設定にします。

抜きゲーみたいな島に住んでる——

よく屋上で大量のシーツを干す病院をイメージする人もいるかもしれないが、現実とは結構異なっている。

大病院は全てクリーニングに出すし、小さい診療所ならそもそも大量に洗濯する程の量は出ない。

とはいえ、大病院でもなければ診療所ほど小さくない、しかも、ちょうど街と集落の間に立地する中途半端な規模の病院であればそうもいかない。

そんな病院に一人、男が屋上にいた。

常夏のそよ風になびく白衣が、彼を医師であることを主張していた。

男は手に持つ紙パックのジュースを一気に飲み干す。やけに口ざわりがどろっとしている野菜ジュースは、空虚な胃袋に染み渡るのを感じながら身を翻した。

短い昼休憩を名残惜しみながら、男は白いシーツの森に身を投じる。現実味のない光景だが、男の周りで起きていることは泣きたくなるくらいに現実であった。

「ほくらあ♡♡ おしっこするときはこの容器にするのよ、ボク♡ きちつとお皮を剥いて、狙いを定めて、ほら♡ 3……2……1、ゼロ……ゼロ……ゼロ……ゼロ……!!」

「ああっ！ そんなに優しくムキムキされたら、白白おしっこ出るの！ 冷たい尿瓶の腔内に出ちゃう！ お姉さん、もう駄目！ 尿瓶に赤ちゃんできちゃうのおおおお！」

何やら森の妖精たちが悦びの舞いをしているが——泣きたくなるくらいに

現実だった。



青藍島。

この離島ではドスケベ条例が適用されている。

条例の内容は単純——島中どこでもドスケベ変態セックスができる、ただそれだけ。

青少年保護団体が助走をつけて悪質なタックルをしてもおかしくない条例だが、そんな条例が敷かれる島民もドスケベ脳ばかり。

道を歩けば性器たちが勃ち並び、絡み合う体はよがり狂い、道には散らばったヌルつとした液体が常夏の日光を乱反射させる。

「おほおほ♡♡ そんなに車間距離詰められたらあ♡♡ らめつ♡♡ 焦っちゃうのお♡♡ 法定速度が守れなくなりゆうううう♡♡♡♡」

「うるせえ何が若葉マークだ！ ビクビクしながらペダル踏んでるうちは車道にでるん

じゃねえよ！ お前がウインカー出すより先に膣内に出してやるからさっさと前にイケよ孕めオラア！」

今日も初心者ドライバー女子とあおり運転系男子が愛車たちを路チユウ♡させながら元気に性活している様子を無視し、そつと診察室の窓を閉めた。

一息ついて机の上の問診票に目を向けた。

——何を隠そう、私は医師である。

昔、スポーツ選手でそこそこ活躍し、怪我が原因で泣く泣く引退したのだが、それも過去の話。

今は苦心の末、外科医として現役時代の経験を活かしながら日々医療に従事できている。

そして、現役時代に世話になった主治医から紹介された病院に雇われ、現在に至るわけだ。

はじめは幸せだった。

なにせ、物心つく前から一緒にやっていたスポーツの道を絶たれ、後もない中がむしやらに進み続けて八年。

いい年した男が雇われる保証もない中、やっと念願の職に就けたのだから。

「次の方」

「はい！ よろしくお願いしまーす！」

今？

もちろん、かつての主治医に全力で張り手してやりたい気分だが何か——？

入室してきたのは水乃月学園の制服を着た女の子だった。

……早速嫌な予感しかしないが、まずは問診を始めることに。

「今日はどうされました？」

「あの一、実は昨日お、二階のベランダから飛び降りて下にあるチンポに挿入るか試してみたんですけどお」

「危険なので二度とやらないでくださいね」

耳を塞ぎたい気持ちになるのをぐっと堪える。

そう。なぜなら、患者は青藍島の島民。

当然、案件は性産的ドスケベセックス活動絡みばかりだ。

「あつ、ちゃんと根本まで挿入しましたしい、安全対策として下にしっかりとマットを敷いてたんですよ」

「結果は心底どうでもいいですけど……では、どこを怪我したんですか？」

「でもお、マットに流していたローションの滑りが良すぎてえ」

「そっちのマットとは驚いた。安全対策の意味とは一体」

まあ要するに、マットとローションの組み合わせのせいで上手く着地できずに腰を痛めてしまったとのことだった。

繰り返しになるが、絶対に真似しないでほしい。

「はいはい、じゃあ湿布出しておきますねー」

「ぶー！ そんな湿布だけ出して診察料取るようなアテにできない外科医みたいな真似しないでくださいー！」

くつ、さつさと終わらせたのに妙にこつちが傷つく言い方して留めてくる……。

「ほらほらあ、もつとちゃんと診てくださいいよお……そのぶつとくてカチカチになつて指で腰と……あつ♡ ついでにお股の触診をお願いしますう♡」

「産婦人科はこちらじゃないですよ。それに腰を痛めてるのにドスケベセックスなんてしたら余計悪化しますから」

「まあまあ♡ 実は私、先生の種——」

「ええい！ 当て身！」

埒が明かないので、カチカチらしい指で握り拳を作り、軽く痴女の腹に叩き込んだ。……ここの島民は診察室とベッドがあればこんな風に迫ってくるのだ。

力負けはしないが、これで数十分も時間を取られて、本当の患者（頭の病気は除く）の診察ができないのは医師として失格だ。

「きゆう」

「よし」

であれば——やはりこの手に限る。

ばたりと気絶してしまった少女。

体に痕がついていないことを確認し、患部に湿布を張り、診察室から叩き出した。
あとは外の看護師に任せよう。

「……………ここに来てからずっとこんななのばっかだな」

椅子の背もたれに深く腰をかけると、キチキチと苦しそうな音がした。

現状を憂いていると、今度はうちの病院の看護師が入ってきた。

「先生、あの方の診察は終わりですか？」

「はい。申し訳ないんですけど、後はお願います」

「わかりました……それにしても、結構なお手並みですね」

ニコニコと笑う看護師に、隠さず苦笑いを浮かべる。

残念ながら、彼女もこの島民だ。

絶対に変な方向に勘違いしている。

「言っておきますけど、私はただ問診しただけですよ」

「またまたあ、ご冗談を。先生の手腕は島中で有名になつてきてるんですよ？」

手腕——腹パンが？

とは思ったが、まさかそれは無いだろう、と改めて己の行動を振り返る。

島民に対する私の診察は大体あんな感じだ。

で、患者が気がついたら湿布と、愛液が乾いた股下、そして当て身による下腹部への痛み。

女——否、このドスケベ条例に毒された島の女ならどう考える？

「よっ、青藍島の『種付けおじさん』!!」

「誠に遺憾である」

どうしてそうなった。

理由もあって、この島に来てから性産的そういつた行為活動からは逃れてきたというのに、なぜそんな異名が出てきたのか。

「いや、私も頑張って気絶した患者さんの太ももに『正』の字をマジックで書いたり、おまんこの周りに愛用の片栗粉液を塗りたくった後でそこら辺の土手に捨ててきた甲斐がありましたよ〜」

「八割方アంతのせいじゃねえか!!!」
「まあまあ、そのおかげでこうして都市部の大病院に負けず集客できているんですからいいじゃないですか〜」

いや確かに事実なんだが、お前は医療をなんだと思っっているんだ。
心の底から糾弾したい気分だった。

「そ・れ・に♡」

やたら色っぽく言ってきたが、私の目は収集車に飲み込まれるゴミクズを見る目から

変わることはない。しかし、彼女が口走った言葉を看過することはできなかつた。

「元力士のガタイで、仕事で汗水垂らしている姿は完全に出来上がってますよ？」

「――」

さっきの患者さんも、それ目当てで来たんですから、と容赦ないトドメも添えられた。

………黙って、立ててある鏡に顔を向ける。

昔やってたスポーツ――相撲から引退し、大分減量したがでっぷりとした容貌。

汗っかきな体質なせいで、額に浮かぶ脂汗。

相撲と決別する意味も込めて、鬘を含めた髪を全て剃りあげたスキンヘッド。

――そこには、*“いかにも”*な*“種付けプレスおじさん”*がいた。

「ただいま戻りました。すぐに着替えてお手伝いしま……先生？　どうかされましたで

「しょうか?」

「おかえり文乃。私、ちよつと心折れたから今日はもう早退しようと思う」

「あつ、すみませんすみません! ちよつと言ひ過ぎました! おっぱい揉ませて

あげますから、まだ予約が一杯なので帰らないでください先生!」

「???」

心を深く傷つけられた私と、意味深に慰めようとする看護師。

その様子に、訳あつて預かっている少女——琴寄文乃はただただ首を傾げる
ことしかできなかつた。

" " " " "教育" " " " "

母がこの世を去りました。

島全体から迫害を受け、禄に職にも就けず。

かといって島から出ることすらできず。

挙げ句の果てにはヤクザが締める裏風俗なるものにまで身を投じ、
文字通り身を削った結果として、最期は病に伏せました。

幼子で無知であつたわたしに、心配をかけないように、まるで近所へ散歩に行くような足取りで仕事に向かう母を止めることなどできませんでした。

想起する度に、胸が張り裂けそうになります。

けれど、母は誰も恨みませんでした。

母とわたしを追い込んだドスケベ条例を。

……死んでくれて清々した、などと宣う島民をも。

故に、わたしも恨みません。

最期まで笑顔で、気高く行き続けた母のように在りたいと思つたから。
爾来、わたしは泣くことをやめ——戦う道を選びました。

ひとりで生きる術を身に着けました。

そして、夜に蔓延る任侠たちや、わたしを血眼になつて探すSHOと戦いました。

今では怒声もヒ首も拳銃も、恐怖を感じることはありません。少し、暗がりには怖いですが、慣れてしまえばどうということもありません。

何もできなかった白痴の頃とは比べ物にもならなくなつたほど、強くなりました。

——宮司さんが、この世を去りました。

偽の戸籍を用意し、身を寄せる場所がなくなつたわたしに住処を用意してくるなど、良くしてくれた方がこの世を去りました。

訃報を聞き、かけつけた遺族によつて肅々と葬儀が行われるのを、わたしは物陰から見ることにできませんでした。

合間の会話に聞き耳を立ててわかりましたが、宮司さんの遺品や神社は取り壊されずにそのままにして欲しいと遺書があったそうです。

……嬉しい反面、それよりも悲しかったです。与えられてばかりで、何も恩を返すことができなかったことに、深い後悔が突き刺さります。

けれど、泣くことは我慢しました。文乃は「強い子」だから。

強くなりました。

強くなった、はずなのに。

とうとう、文乃は独りぼちになりました。

この島でもっとも大きな神社——ちんちん大社の裏。

かつて宮司さまがいた、使われなくなった神社。誰にも見つからない住処、そこで武器であるライフルを抱え、身を縮こませる。

今日も任侠連中と戦いました。

無事に戻ってこれましたが、慣れない巡回ルートを使ったためか、足首が痛みます。

無我夢中で走ったときに捻ったのかもしれない。
だけど、本当に捻ったのは、胸の奥かもしれない。

今は亡き、母の言葉が想起します。

“文乃は強い子だから”

その言葉を胸に、戦い続けてきました。

—— 違います。違うのです。

これからも、強くありません。

—— 文乃は、強くありません。

目指す理想のためにも、戦い続けましょう。

—— 独りでは、何もできないのです。

タン、と引き戸が開けられる。

意識の切り替えが一拍遅れた。

身を隠すことを諦め、銃口を入り口に向けます。

今日戦った任侠か、または何度も交戦したSHOか、SSか。

つけられていた可能性に焦りながらも、表情に出さず、無機質にスコープを覗き込みます。

月明かりの逆光の中。

そこには

「……………」

——ニチャア……、と、そんな笑みが溢れていました。



「……………」

——ニチャア……と、目の前の鏡は笑っていた。

退勤間際、白衣を脱ぎ捨てた後に駆け込んだ男子トイレの中で、盛大にため息が溢れる。

何が「種付けおじさん」だ。

ほんのちよつぴりガタイが良すぎて、ほんのちよつぴり髪の毛がないだけだと言うのに。笑顔が汁っぽいところが好み、と今日の患者が言っていたので確認してみたが……確かに爽やかとは言えないが、汁っぽくはないと思う。多分。

ギャルⅡビッチ、委員長Ⅱアナルが弱い、レベルの偏見ではないか。これには遺憾の

“意”を示さざるを得ない。

「あ、ごめんね★俺、妹がいたから、つい癖でポルチオポンポンしちゃうんだ」

「あんつ、だめええ♡♡ にっこり笑いかけてチンポ出し入れされてるだけなのに、んっ♡♡ 感度が上がっちゃう♡♡♡ 都合が良すぎる展開なのに “高” 感度急上昇しちゃうのおおおお♡♡♡」

「あれえ？ 俺また何かやっちゃいました？」

———トラックで轢かれて目が覚めたら異世界の病室にいた転生者プレイかな？

悲しいことに、当院では特定の病室や手術室以外でのドスケベは黙認されてしまっている。悲しいことに。

何やらトイレの個室でふんだんに特典を振りかざして盛り合っているようだが、一瞥もせずに出ていく。

「お待ちせ、文乃。帰ろうか」

「はこ」

出入口のソファに座っていた男子生徒の服を来た少女——琴寄文乃とともに帰路につく。

そろそろ陽が落ちそうな夕暮れ時。

集落地になると街灯すら心もないほどに真つ暗になる。この時間帯になると外出する島民はほとんどいなくなる……はずだ。

今日の帰り道はやけに豚骨の香りがするな———と思った矢先、不味いことに全裸の雌豚がハイハイして通り過ぎようとしていた。

「ほーら、文乃。今日も星がきれいだぞー」

「左様でございます。あと一時間もすれば星座もよく見えるはずです」

……よし、通り過ぎたな。

後ろ姿を見たらアナルになんか変なもの刺さっていたことを除けば、青藍島によく出没する一般的な豚野郎……いやさすがにこの島でも珍しい。

暗くて細部までは見えなかったが、土台のようなものが見えたので何かのフィギュアか。

個人的な嗜好に文句をつけるつもりはないが、医師としては排泄器官である肛門に何でもかんでもモノを入れようとするのは辞めてほしいと切に願う。事故になった際にその惨状を見せつけられる身にもなってほしい。

こうもんであそばないでください。
閑話休題

「そういうえば、文乃と知り合ってからもう2年くらい経つのか」

「具体的には1年と356日……日数でいえば721日になります」

「何てタイミングでこの話題を切り出してしまったんだ、私は。そんなこと言わせてしまつてすまない」

「むべ……う？」

絶望する私と、理由がわからず首を傾げる文乃。

そう。文乃と会つたのは、この島に来たばかりの頃だった。

まだ島の地理がわからないからとりあえず高いところから島中を見渡してみよう――

そんな軽率な気持ちで山にある観光スポット“ちんちん大社”に向かっていた中、道に迷ってプチ登山をしている途中に見つけた廃れた神社で出会った。

いきなりライフルで狙撃してきたことには驚いた。

しかし、事情を話したら、返ってきたのはきつちりとした謝罪と、なおかつ目的地まで案内してくれる丁寧な対応。

この島に来てからようやくまともな人間に会えた感動で、年甲斐もなく涙してしまつたくらいだ。

嬉しくなつてつい、着物の下に隠していた外傷も手当してあげると……明らかに一般人ならつかないような傷がちらほらと。

詮索しないで欲しそうな様子を感じ取れたため、事情は深く聞いていない。

ただ、大人として見過ごすことはできないのも確か。少なくとも、まともに病院で治療を受けられない理由があることを察した私は、「こっちで便宜図るから、また怪我したらここにおいで」と病院の場所を教えたのが初対面だった。

「……いや、最初の頃と比べると随分と様になったと思つてな」

「そんな………恐悦至極でございませう」

その後、ちらほらと顔を出しては治療し……を繰り返していくうちに彼女も心を開いてくれた。

つい最近、自主的に医療を学びたい、とおそるおそるお願いされたため、こうしてお手伝いさんとして当院に来てもらっている。

……ちなみに、『琴寄文乃』という名前もそのタイミングで初めて聞いた。

文乃曰く、これから教えを請う先生に本名を名乗らないのは失礼だから、らしい。

その言葉の裏からは、本名を隠さないといけない理由があることを意味しているが……私にとって、文乃という名前が嘘か真かなぞ些細なことだ。

「文乃はまだ未熟な身でございます。先生のように急患にも冷静沈着に適切な処置ができるほどでは……」

「まあ、それを簡単にやられたら、今度はこっちの立つ瀬がないからな」

「も、申し訳ございません。差し出がましく、先生のお仕事を奪おうとしたつもりでは……」

「わかつてる。そんなに謝る必要はないから」

「も、申し訳……!」

相変わらずの腰の低さ。

教える立場と教わる立場……伴う礼節はあるだろうが、もう少し気安さが欲しいところだ。どちやクソ上下関係厳しかった相撲界にいたころを思い出すから。イライラしたからって、私の作ったちゃんこ鍋をぶちまけるような親方にはこりこり——あ、思出ししたらあのハゲぶん殴りたくなってきた。

……文乃がいる手前だ。話題を変えるとする。

「そういえば、文乃は医者になりたいのか？」

「え……？」

さりげなく振った話題に、文乃は目を白黒させた。

「いや、熱心に私の話に耳を傾けてくれるから、てつきりそうなのかと思っただけど」
「……………」

まさか、そんなこと言われるとは思ってもみなかった。

変化が乏しい文乃の表情から、珍しくそんな心情が読み取れた。

「なら、質問を変えようか。文乃は何か夢があるのか?」

医療を学んでいるからと言って、必ずしも医者になりたいなんて、決めつけはよくなかった。もう少し幅をきかせた質問に変えると、文乃も腑に落ちたように頷く。

「——はい。文乃には、理想とする未来がございます」

その赤い瞳は真っ直ぐで、吸い込まれそうなほどに強い眼差しだった。

理想とする未来——

彼女の瞳が見る先は、一体どんな景色が写っているのだろう。

「そっか。じゃあ、その未来の中で、文乃はどう生きたいとか、考えたことある?」

純粹な疑問を口にする、また文乃は目を丸くした。

あ、これは考えたこともなかったんだな、とわかってしまう。

「生涯を通してお仕えしたいご主人様がいらつしやるのであれば、その方にお仕えしたく……すみません。漠然とした回答しか用意できぬ、至らぬ文乃をお許しください」

「いいんだ。その年でそれだけ考えられるのは素晴らしいことだ」

もによもによ、とした口調の文乃の頭にそつと手を置く。

……力加減に全神経を研ぎ澄ましながら。いくら処置はしているとはいえ、どうしようもなく脆くなっているのだ。気高い彼女の頭部は。

「人生、苦しくて挫折そうな時は必ずやってくる。——そんな時は、自分の夢とか、目指すべき目標を振り返っておくんだ。その夢の中で、自分がどんな風に生きているのか、とかも考えるとなおのこといい。それがきつと、文乃の力になってくれるはずだから」

ちよつと説教過ぎたかな、と思いがらも頭から手を離す。

自分の腕で隠れていて、頭になった文乃の顔。錯覚かもしれないが、さつきよりも

すつきりとした表情のように見えた。

「先生は、ごさいますでしようか」

「私の、夢？」

こくり、と頷く文乃。

……まあ、ここまで言っておいて、自分は言わないなんてかつこつかないか。

「そうだね。私はもう何度か叶えてしまっている身だから、大した望みはないんだけど……じゃあ、カセイに到達したい、とか？」

陽の反対、迫る夜空を見上げながら、そんな絵空事を口にした。

冗談のように——でも否定されたくない、そんな複雑な思いを乗せた言葉は、文乃に届いただろうか？

「笑いませぬ。文乃は、大変素晴らしい夢だと存じます」

「そっか。ありがとう」

思わず笑顔になつてしまふ。

私——いや、俺も、彼女の理想が成就するように、力になれることがあるなら力にならう。

そんな決意を胸に、集落あたりで別れたのであつた。

笑顔——あつ。

「……つと、そうだ。文乃、私の笑顔つて、傍から見たら怖いかな？」

「いえ、怖くありません。文乃はその笑顔に救われた身でございまする故」

「だよね。文乃は良い子だなあ」

「ぬっへっへ」

決めた。今度、お菓子買ってあげよう。



一人で住むには広すぎる屋敷。

襖から僅かに光が漏れる、薄暗い部屋。

丑三つ時より少し前————そこで、現役時代から習慣となっている“鍛錬”をしていた。

『ひううつ♡ もうダつ♡許し♡ つゝんんんんん♡♡♡
 ♡♡♡ い、イゝくつ♡ イっちやうううううう♡♡♡』
 「はい勝ちイイイイイイイイ!!!」

“鍛錬”である。

「くつ、これでも駄目か……………」

ガツツポーズしていた手とは反対側の手。

ティツシユとともに手を退け、我が“わからせ棒”の様子を見て肩を落とす。

散々いじめ抜き、鍛えてきたにもかかわらず、返ってくるのは文句を垂れるように出てくる濃い“強靱大人液”だけ。

今日も一人の生意気なメスガキの「教育」わからせに成功したが、心の中では敗北感のほうがか
勝っていた。

「ノーハンドオナニー……まさか本当にできるとは思わなかったが……これでも叶わ
ないのか」

ヘッドホンを外しながら起き上がる。

青藍島の患者たちを相手にしながらも、男の子の日——キンタマがギョルギョルし
てちんちんがイライライラビキビキグツグツする現象にも耐え、貯めに貯めた
オナ禁2週間分の強靱大人液。

まるで全身が勃起でもしているかのような錯覚を覚えながらも、元力士の経験を活か
した筋肉操作で尻の筋肉を匠に使った結果、かつてないほど濃いのが出た。

……はずなのに、我が息はずつと「半勃起」のままであった。

「そういえば、同じ不能イナホ気味仲間の@junonaniistさんはどうしてるんだらう。
あの人作のオナホ使いたいんだけど、3Dプリンターがなあ……病院にあるやつ使いた
いな」

後始末を終え、スクリーンの前に座り込む。

全世界の同志たちが集うSNS "Onatfer" の皆に結果報告をする。

返ってくる励ましの言葉は、仕事と島民で荒んだ心までも癒やしてくれる。

そうだ。失敗なぞ数え切れないほどした。

医者になったネットワークを使って知り合った数々の権威たちも首を横に振ったから何だという。

こんなことで諦めきれない。

夢で、終わってたまるか。

イメージするのは夢の先——

「ちくしょう……！ 完全体に、完全体になりさえすれば……！ そしてそれを常に保

てれば、せめてカセイ仮性には辿り着けるはずなのに……!」

つい数時間前に口にした絵空事が虚しく響く。

目を落とすと、そこには生まれたときから連れ添った憎らしい相棒———そいつは、
どうしようもないくらいに「真恥ずかしがりやさん性」であった。

ソノ男、種付職人

相撲の鍛錬は辛かったが、苦しくはなかった。

その代わり、まわしを付ける時が辛いし苦しかった。

『おいおいおい！　なんだその情つさけねえモノ！　随分と可愛らしいでちゅね〜！』

着替え中に下衆な笑い声が反響する。

……下半身だけでなく、胸まで締め付けられている気分だ。

伝統のある競技、といえれば聞こえはいいが、少なくとも俺のいた部屋は、極めて前時代的な上下関係や押揃いが横行していた。

大なり小なり、どこでもよくある話だ。

それにたまたま主な標的になったのが、俺のイチモツだただけのこと。

『男湯なのに何前隠してんだよ！　どうせ皮被ってんなら隠したところで変わんねえだろハハハハハッ！』

『衝撃与えてやればその皮も引つ込むんじゃないの？　おい、みんな来いよ！　一列にならんでひとりずつビンタしてやろうぜ！』

位の高い先輩から同期まで便乗して、そんな“治療”が始まる。

煮えくり返りそうな腸を抱えながら、張り付いた笑顔で返していく。

『親方！　こいつの名前がなんて——がいいんじゃないですか！』

『ははは！　そりやいいわい！　良かったな——！　似合いの四股名じゃねえか！』

そんな仕打ちに耐え忍び、ようやく土俵に立てるようになった末に賜った名前すら、俺にとつては“忌み名”と化した。

親方へ深々とお辞儀をしながら、齒を食いしぼる。奥歯が砕けてもおかしくないほどに。

きつと、この瞬間からだろう。

こいつらに“理解させ”てやるにはどうすればいいと考えたのは。

俺が弱いから？

——ならば鍛えればいい。どんなやつが相手でも抵抗すらさせない圧倒的な肉体を持ってばいい。

立場が低いから？

——ならばのし上がればいい。それこそ、頂きに立てば誰もこんかナメた真似はしないだろうに。

ドス黒い感情に突き動かさられるように求めていき——幸いにも結果はついてきた。

俺が勝ち上がる度に、表では我が物顔で誇らしく振る舞い、裏では化物を見るような目で見てくるやつら。

反吐が出る。

沢山の人に囲まれているはずなのに、結局のところ独りなのは変わらない。

けれど、なぜだろう。

こうして、今まで虐げてきたやつらが尻尾を振って媚を売ってくる様子を見下すのは

——
堪らなく、
気持ちよかった。



「手酷くやられたっすねー。こんな怪我人の行列作られると敗戦兵の末路って感じす

るっす」

「は？ 負けてないが？」

「いや、ただの例え話なんすけど……突然キレてどうしたんすか？ 更年期？」

おつといけない。

てつきり昨日の戦闘の結果のことを言われてしまったのかと勘違いしてしまった。

「……ごめんごめん、何でもないよ。あと私まだアラサーだよ？ はっ倒すよ？」

「やっぱキレてるじゃないっすかー！」

隣に控えている女子生徒に謝罪し、気を取り直して目の前の患者の処置に集中する。

今日はいつもの診察室から離れ、島にある唯一の教育機関である『水乃月学園』にいる。

医者というのは、いつも病院にいるわけではない。非番の時以外にも、新しい技術を学ぶためのセミナーに足を運んだりと遠出をする時もある。

特に離島や山奥の田舎でよくあるのが、巡回による問診だ。年寄りばかりの限界集落などでは、足腰が弱い、寝たきり、エトセトラエトセトラ……と言った理由から通院で

きない人のために定期的に訪問による問診を制度化している自治体もある。

青藍島は若年層も多いのでかなりマシな方だが、集落にはそういった人も一定数住んでいる。そのため、当院では一週間に一度は医師による巡回を行っている。

今日は私の番で、巡回が終わった夕方ごろ、水乃月学園に呼び出されてしまい、こうして診察をしているわけだ。

「よし、これでリストに乗っている人たちの処置は全員完了かな」

「サーっす！ 協力感謝っす！」

びしっ、と敬礼する腕章の女子生徒、スズ子君に生徒の名簿を返す。彼女こそ、巡回中の私を呼び出した張本人だ。

心苦しいことなのか喜ばしいことなのか判断に迷うが、今の自分は真つ当な医療に従事していることを実感していた。

「いやー、やっぱり親方はすぐに診てくれてほんと助かるっす！ 大病院の医者なんて全然来てくれないっすし、予約させてくれないっすし、そのくせにエラソーに金だけ取ろうとしてくるんすから！」

肩の力が抜けたのか、患者用の椅子に腰掛けるスス子君。

彼女が所属している風紀委員——SSには個人的な知り合いもいるので、何度か怪我人を診たこともある。なので、スス子君や他のSS隊員とはそれなりに顔見知りが多い。

「その大病院の先生たちがそつち系の病気対策をしつかりしてくれるから、この島の性産業は成り立ってるんだぞー」

「そうだよ、スス子君。僕のデータによれば、青藍島のここ2年間の性病発生率はジャンボジェットが墜落する確率とほぼ同じなんだ。これも本島——いや、世界各国から優秀な医者が来ているからこそなんだよ？」

噂をすれば、会話に介入する声が後ろから聞こえた。銀縁の眼鏡のフレームを触れながらタブレットを片手で持つ男子生徒の姿は知的な印象を与えてくる。

「ベルトさんのくせして確率なんて言葉出てくるなんて……今日は赤飯つすか？」

「ははは、それはいいね。赤飯なんて久しく食べてないから、僕のデータも今日の晩御飯

は赤飯のお腹になってしまったって言うてるよ」

「前から思ってたけど、シユー君のデータってペットか何かなの？」

彼——シューベルト君もその一人だ。

情報収集が特技と自称しているが、そんな有益なデータがあつた試しが……いや、さっきのは普通にデータキャラしてたな。今日は空からザーメンでも降るのかな。

「けど、今日は随分と怪我人が多いね。何かあつたの？」

話題を変えて、素朴な疑問を投げかけた。

学園に来ると診察するのは自分の身を顧みない性産的行為による怪我ばかりだ。

しかし、今日はSS隊員……それなりの大人数の外傷が多い。骨折ほどの大事に至っている子はいなかったが、打撲、擦り傷、切り傷、一番酷いのは軽い脳震盪と言つたもの。

SSの訓練は過酷な内容だが、それでもあれらの傷は妙な印象を持ってしまふ。

そんな疑問に、穏やかじゃない単語を携えて答えたのはスス子君だった。

「親方、知らないんすか？ 最近、〃反交尾勢力〃の動きが活発になってること」
「反交尾勢力？」

曰く、この島のドスケベ条例に反して、性産的行為を逃れようとあれやこれやと画策してSHOやSSを出し抜いている勢力とか。

今日の隊員たちの怪我也、そんな〃反交尾勢力〃と学園の裏山で追いかけてこした結果によるものだそうだ。

「ただのデモ隊程度ならともかく、相手の装備が充実し過ぎているように感じる。裏で何者かが支援しているのかもしれないけど、これ以上は僕のデータにないね」

「さーすさーすー！ オペレーターとしては、夜で視界が最悪なのにあれだけのスムーズな連携とれるなんて、あいつらにもバックにオペレーターがいるしか考えられないっすー！」

「ふーん」

困り果てたようにため息をつく二人を傍目に道具を片付ける。

……まあ、そう言った輩が出てくるのは無理もない。ドスケベ条例は〃ドスケベセツ

クスできる”と言った内容だが、実態はSHOやSSの存在によつて“強制”と化している。

プラトニツクな恋愛をしたい、婚前交渉は反対、なんて人間がいれば、条例違反として即刻拘束の上に断頭台に立たされて公開処刑だ。

そんな現状を目の当たりにされると、本島の偉い政治家や諸外国で賛否が問われるのも仕方ないと思う。

「私としては君たちが怪我さえしなければそれでいいかな。頑張るのはいいけど、ほどほどにね」

「親方薄情つすー！ スス子たちが夜に叩き起こされたりしてすーすー言つてるのに他人事みたいじゃないつすかー！」

スス子君からブーイングが飛んでくるが、仕方ない。いかんせん、私のような島に居ても個人的な理由からそういった圧政から免れている人間としては、当事者として発言することは憚れる。

「ごめんごめん。私を身内のように扱ってくれるのは嬉しいし、君たちが忙しそうな

は心が痛む。けど、あくまで伝手で診ている部外者に過ぎないからね。だから、これ以上は——」

「つ、そうですね。少し話過ぎました。いやあ、どうも先生相手だと、つい口を滑らしそうになってしまう。やっぱり、貴方は僕のデータ以上のことを簡単にやっつてのける」
「ま、ベルトさんのスカスカなデータはともかくとして、親方まで巻き込む話でもなかつたつすね」

この場はもつともらしい詭弁で誤魔化すことにした。二人には悪いが、この秘密は文乃にも話していない。立場的にも心情的にも、知っているのは一部だけに留めたいのだ。

シュー君もスス子君もまつすぐな性格だから、打ち明けられないことにも心が痛むが、堪えるのは慣れている。

コンコン、と近くの窓から音が聞こえた。

「——おつ、チュパちゃんが戻ってきたつす」

見れば、一羽のオウムが窓を突いていた。

スス子君の飼つてるオウムで、頭はいいんだけど……目が完全にキマつてることと常にジュルジュル言つてるからちよつと怖い。

フェラチオウムという品種らしい。何だそれ。

……もう用は済んだし、そろそろ帰るとする。

「それじゃあ私はこの辺で。二人とも、良きデータを！」

「はい！ 先生も良きデータを！」

「親方ばいびー……って、えっ、スス子もそれやんないといけないやつつか……」

「ジュルルル！ ハイカチ！ オマエヨワヨワ！ ジュルルルルル！」

——いや、負けてないが。

二人と一匹に見送られて寮を出る。夕陽に照らされる時計台を見ると、いつもならもうすぐ退勤時間になる頃だった。

一旦病院に戻るのも億劫なので、今日はこのまま帰るとしよう。それまでどうやって時間を潰そうかと思考を巡らせる。

「あ、そうだ。せつかくだし」

思いつきで、校舎の入り口をくぐった。

一応招き入れられた側なので、これくらいは許されるだろうと思いつながら生徒たちが使う下駄箱を通り抜ける。

「……そこっ！ 廊下はセックスする場所だと何度言えばわかる！ 談笑に勤しむ暇があつたら下駄箱から靴と上履きを出し入れするか、マンコにチンポを出し入れをしていろ！」

たわわに実った稲穂のような体位の変態交尾畑の中で、厳しい叱責が飛ぶ。声の発信源に、私の目的はあつた。

「おーい、教官殿ー」

「……何だその腑抜けた声は！ 声までフニヤチンとは随分粗末な————つと、先生!?!」

厳しい表情からは一転。

今度は慌てたように取り繕う一人の風紀委員。

彼女こそ、風紀委員長——SS二番隊隊長の糺川礼その人だった。

「ごっごっごっこれは失礼しました！ その、診察はもう……………」

「もう終わったよ。幸い、みんな軽症だったから、二日くらい安静にしていればすぐに元通りさ」

「ありがとうございます！ 今回も先生のお手を煩わせてしまい、申し訳ありません！」

深く、深くお辞儀する礼君を宥める。

礼君は私がSSの中で最も古い仲だ。彼女がきっかけで私はスス子君やシュー君といった他のSSとも知り合ったわけだ。

「最近、鍛え方が足りてなかったと常々痛感させられるばかりで……………あいつらには今日から特別メニューを課すつもりです」

「話聞いてた？」

「ああいえ！ もちろんそのつもりで、私が言ったのは心構えの話でええと……………」

あたふたしっぱなしの礼君を見ると、思わずこちらも笑いそうになる。

傍から見れば厳しいように見えるが、彼女にとってSS隊員は部下であるとともに家族同然の存在で、鬼教官になるのは無事にいて欲しい気持ちからくるものだ。それを知っているからこそ、私も今日のように隊員が怪我した時は診てあげたいと言う気持ちになれるのだ。

「その辺は立ち入るつもりはないよ。じゃあ、診察料は病院に直接お願いね」

「わかりました。しかし、いつもの代金でよろしいのですか？ 今日には特に怪我人が多かったですし、何でしたら桐香様には私から………」

「構わないよ。いつも見返りはもらっているし」

そう、きっちり私は見返りを貰っている。

実は、今日の診察はちよつとした契約に基づいている。

こちらの対価は、SS隊員を診察する際は診察料は定額にすること。

そして、その見返りは私を例外的に非性産者として扱わず性産的行為を免除すること。

いくら個人的な事情がドスケベの際に危険が伴うからと言って、取り締まる側には情状酌量の余地としては認められない。だからこそ、公的な後ろ盾を手に入れることにした。

無論、対価が明らかに私個人としての範疇を超えているが、それはSSのトップである生徒会長の計らいで解決した。

どうやったのか詳しく知らないが、表向きはこの島で発言力があるSHOから“要請”し、うちの病院が“受託”している形にしてみました。これで裏で私が取引していることを傍からわからなくなったわけだ。よくもまあ個人で、特別秀でているような要素がない私にここまでしてくれたものだ。

「おい、見ろよ……あれ…………！」

ただ、問題点がひとつ。

たとえSSが知っていても、一般人にはその事情は適用されないと言うこと。

魔女裁判ではないが、誰かが私を“非性産者”として指差し、SHOが動き出せばたとえSSも手出しできなくなってしまう。SSはSHOから奨学金を受けて成り立っている以上、上位組織であるSHO相手には下手に出ざるを得ないのだ。

であれば、今度は世論を味方にする必要がある。そのためにあの生徒会長がやったことは

「あの『ザ・ベスト種付けおじさん』の称号を持ちながら、心理催眠学の権威として名高い『先生』だぜ……!」

——わけのわからない称号とわけのわからない噂を流すことだった。
いや待て、後者はともかく前者はどこから来た？

うちの病院か？ またあの看護師が変な噂流したのか？

「ああ、生で見ると存在感が違うな……！」

「フツ、『不健全な体には、不健全な魂が宿る』と言うわけか……至言だな……」

「あんつ、目が合っちゃったあ♡ あたし催眠かけられちゃったかも……♡ 感度が3000倍になったかもしれにや……くうつ♡ こんな催眠に屈するにやんてえ……♡」

「さすが先生！ 一瞥するだけで完全催眠状態にするなんて……！ くそつ、俺も負けてられねえ！ よし、進路は心理学催眠科の大学に決めたぜ！」

泣きそう。

「……やっぱあの会長って人の心がないんじゃないか？」

「……すみません。桐香様曰く、やっぱりこうするのが一番効果的らしいんです」

いや、助かってるけど！

随分前に仙波さんが目を合わせたただけで本当に催眠にかかっちゃったから、道端でSHOが絡んできても『今実験中だから話しかけるな』って言ったら素直に引いてくれるようになったけど！単純にあの人が思い込み激しいだけなんだけど！

……それまで計算してやったとしたら、さすがにあの生徒会長を人として見れなくなるから考えないようにしてる。

いかん、生徒たちが集まってきた。

これ以上校内にいたらまた種付け依頼が来て腹パンしないといけなくなる……………。

「それじゃあ、私はこの辺で。」

……今は忙しいかもしれないけど、落ち着いたらお母さんのところにも顔を出してあげなさい。不安なら私も付き添うから」

「っ！はい、ありがとうございます」

逃げるように立ち去り、校門前に抜け出す。気がつけばそろそろいい時間なので、さつさと家に帰って「鍛錬」^{オナニ}に励むこととした。

……昨日は○学生のメスガキだったし、今日はサキユバスのメスガキと対戦しようか。

そんなことを、考えていた時——ふと、文乃の顔が頭に浮かんだ。

「あ、文乃にケーキ買っておこつと」

昨日、お菓子買ってあげるって思ってたことを実行しようと思い、帰り道の進路変更することにした。



一方、学園の地下。

「諸君——よく集まってくれた」

男の眼鏡が怪しく光る。

光の反射で、その目と奥底は見えない。

この青藍島で、新たな陰謀が動こうとしていた――

「……………いや、何やってんのよ淳」

「橘くん、メガネがピカーってなってすっごい悪役ぽかったな！　すごいすごい！」

「いやあ、このモニター付きのテーブル見たときからずっとやって見たかったんですよ」

「橘さん、たまに子供っぽくなりますよねー」

「お前は赤ちゃんの口みたいに何でもアナルにぶっこもうとする癖に何を言ってるんだそろそろ養豚場にでも送りつけてやろうか？」

……訂正。
橘淳之介が動こうとしていた。